綾小路の妹が転校してくるよくある話。

靄詩真輝

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルの通りです。

再投稿です。

以下、綾小路千咲（オリキャラ）の成績。

ＯＡＡ　綾小路千咲（あやのこうじ　ちさき）特別措置成績

学力――――――Ａ＋（９６）

身体能力――――――Ｃ　（５０）

機転思考力――C－（45）
社会貢献性――B＋（81）
総合力――B（66）

目次

2　1

15　1

1

「何故お前なんだ……千咲」

Ｃクラスから Ｄクラスへの降格後、二年に進級して間もなく。

我らがＤクラスに転校生がやってきた。

その転校生の姿を見て、オレは思わずそう呟いてしまう。

懸念はあった。

あの月城などという理事代行が就任した時点で、あの父親からのもう一人の刺客がそろそろ来るだろうと。

しかし、これは予想出来なかった。……否、可能性はあったし、予想は出来たはずだ。おそらく、無意識の内に除外していたのかもしれない。こいつだけには来て欲しくないと。そう無意識に。

茶柱の先導のもと、オレの妹、千咲は、長いセミロングの茶髪を揺らしながら教卓の前へと歩き、こちらを向いて立つ。

気のせいか、一瞬目があった気がした。

「おー！　カワイイじゃん！」

「確かに〜！　美人さんだね！」
池がそう嬉しそうに言うと、何人かの女子がそれに同調して声を上げる。
前でその黄色い声を聞いた千咲は、長い髪の毛先を人差し指でクルクルとして、照れるフリをした。
「カワイイぃ！」
「少し黙っていろ池」
池が案の定また叫んだが、茶柱の一声によって制止される。
「皆もう察していると思うが、転校生だ。この学校では異例中の異例だがな。さあ、自己紹介を」
「あ、はい」
茶柱の指示で、千咲は自己紹介を始める。
「えーご紹介にあずかりました、転校生の、綾小路千咲です〜。趣味は読書、好きな食べ物はイチゴケーキです！仲良くしてくれると嬉しいです！」
そう快活に挨拶をする。なるほど、好印象を持たれる挨拶か。オレとは正反対だな。あの男、千咲には社交性を磨かせたのか？
そう思考を巡らせていると、クラス中の視線がオレに集まっている事に気づいた。
まあ、仕方がないだろう。オレは千咲を見て、軽くアイコンタクトを取ると、再び窓

の方を意味もなく見る。
「えーと……。お察しの通り、あの端っこで窓の方を見ている清隆は、私と双子のお兄さんです～」
「マジかよ千咲ちゃん！　あ、綾小路が兄ちゃんなのか!?」
「いや、その驚き方おかしくない？」
「は!?　何だよ長谷部！」
　いつもなら山内も池と同じようなリアクションを取るのだろうが、今はもう彼はいない。
　一人でワアワアと騒いでいる池に、波瑠加がツッコミを入れて、再び騒がしくなる。
　そろそろ茶柱が一喝して黙らせそうだが、それよりもオレは、隣人、堀北からの鋭い視線に胃が縮みそうだった。
「本当に彼女はあなたの妹なの？」
「……まあな」
「しかも同じ年齢」
「……双子だしな」
「聞いてないわよ」
「……聞かれてないしな」

「あなたはやっぱり、分からないわ」
「分からない方がいい」
「……どういうこと？」
「さあな」
「気持ちは分かるが、静かにしろお前達」
と、ここで。再度発せられた茶柱の一声に、教室が静まる。
「綾小路……妹、お前は兄の後ろに座れ。その方が色々と融通が効くだろう。机は……空いている机をあいつの後ろに持っていけ」
「了解しました～」
千咲は一度お辞儀をすると、テクテクと元々山内が使っていた机を運び、オレの後ろへと座る。
当然だが、皆の注目を浴びている。兄も妹もだ。
そうなのに、千咲は後ろからオレの耳元に顔を近づけ、囁いてきた。
「お久しぶりです。お兄さん」
「……」
語尾にニコッとつきそうな位に朗らかな印象を持てる声で語られるも、オレは無視する。

正直オレは、この状況に酷い苛立ちを覚えていた。あの男が刺客を送ってきた事自体は、正直どうでもよい。よくはないが、分かっていたことだ。オレが苛立っているのは、後ろに座っている彼女を送り込んできたということだ。

千咲……。オレがこいつについて覚えているのは、ごく僅かな事しかない。何せホワイトルームにいる間は、こいつと喋る事さえ出来なかったからな。

千咲も確かに、ホワイトルームにはいた。しかしすぐに脱落した。その事実と、一度だけ、おままごとをしたという記憶がある。

ホワイトルームが創設される、少し前の話だ。

……いや、別に深く語る必要も無いだろう。

???

「きよぽ～ん」

昼休憩時。早速というか、波瑠加と愛里、そして啓誠と明人がオレの席にやってきた。

千咲は、他の女子達に連れられて、食堂に行ったようだった。

オレの机の周りに各々近くにある椅子を持ってきて座る。今気づいたが、全員弁当を持ってきていた。もう教室で昼食も済ませるつもりなのだろうか？

あれ？オレの昼食は……？

「き、清隆くん！　これよかったら……」

オレが少し昼食の件のせいで黙ってしまっていると、愛里が声をかけてきてくれた。そちらを見ると、なんと驚き。机の上に置いてある彼女のであろう弁当とは別に、もう一つの弁当箱を、オレに差し出してきてくれていた。

「ありがとう愛里。すまないな」

「う、ううん！　大丈夫だよぉ！」

オレが感謝の言葉を述べると、愛里は気にしないでと返してくれる。

しかし、本当にありがたい。女子からお弁当を作ってもらうなんて初めてだが、とても嬉しい。

「清隆、早速だが――」

「もうゆきむー！　とりあえず食べながらでいいでしょ！昼休憩終わっちゃうし」

「そ、それもそうだな。すまない。早とちりしてしまった」

啓誠が何かを聞こうとしていたが、波瑠加が遮り提案をする。『食べながら話そう』と。……嫌な予感しかしない。

まあある程度何を聞かれるかは予想出来るがな。

「それじゃあとりあえず、いただきます！」

波瑠加の音頭の後、各々食前の挨拶をして弁当を食べ始める。

「明人は、部活とかじゃないのか？」

「あ～……今日はサボりだサボり。今朝のあれ見ちゃ、部活に集中なんか出来ないからな」
「だよね～。あんなの見せられたら、ね～？」
「そうだな。今回の話はそれだ清隆。お前には、洗いざらい話してもらうぞ」
「あ、で、でも、清隆くんが話したくない事は話さなくていいからね」
オレの明人への質問のせいで、本題に入りやすくなってしまっていた。
失態。まあ遅いか早いかの問題だ。キッカケが無くとも、波瑠加がいつものペースで聞いてきただろう。
「で、きよぽん。本当にあの子って妹なの？」
「言われてみれば似てる気がするって感じだけどな。目元とか」
「……まあ、本当だ。確かに千咲は、オレの妹だ」
「そう……なんだ」
波瑠加からの質問に、オレは肯定する。愛里は何故か、落ち込んでいる。
「でも、何でこの時期、というかこの学校に転校してきたんだろうね？」
「……さあな。オレにはサッパリだ」
「そうか。兄であるお前にも分からないか」
波瑠加のご尤もな疑問に、オレが肩を軽く竦めて返すと、啓誠がメガネをクイッと上

げてそう言ってくる。

……まあ、転校してきた理由は前述の通りである程度分かっているのだが、彼らには言わなくていいだろう。

何よりこの問題に、彼らを巻き込みたくない。

「だいたい、色々とおかしいよな今回の件。この学校って、転校のシステムとかあったんだな」

明人が弁当のウィンナーをパクリと食べると、箸をクルクル回しながらそんな疑問を口にする。

確かにオレも驚いた。

クラス内での団結が何より必要なこの学校で、転校生を入学させ、そしてもうほぼ成り立っているであろう一クラスに放り込むなんて。色々と非効率で、非合理的だ。

……あの男の指示で、月城理事代行が勝手に決めたという可能性があるが。というか、十中八九それだが。

「まあ、適当に接してやってくれ。あいつは俺と違って、社交的だしな。愛里も仲良くなれると思うぞ」

「そ、そうかな……」

愛里は顔を俯かせ、モジモジしてしまう。
「このタイミングで聞くのはおかしいかもしれないが清隆、妹の実力に関してはどんな感じなんだ？」
「あ、ゆきむーそういう事聞いちゃうの？」
「し、仕方がないだろう！　そういう学校なんだ。今回はただでさえイレギュラー。しっかりと戦力を把握して、計画を立てていくのが当然だろう」
「でもさ～、やっぱりタイミングってやつがあるじゃん」
「気にするな波瑠加。千咲の実力だが……まあ、オレと同じくらいだと考えといてくれ」
千咲の事だ。オレが適当に言えば、合わせてくれるだろう。
「そうか……つまり未知数という訳だな」
「おい何故そうなる」
未知数って表現はやめて頂きたい。普通にしてくれ普通に……と、言いたいところなのだが、前日の一年最後の特別試験では、目立ちすぎた感がある。
押し付けられたみたいな感じとはいえリーダーを務め、クラスに指示を出した。表向きでは、堀北から出された指示を綾小路が出すといった構図になっているはずだが、察しのいい者は察しているだろう。ただ認めていないだけで。
啓誠は、というより、ここにいるグループの全員は、オレの事を完全に上として見て

いるらしい。それでも今まで通り普通に接してくれているので、感謝している。
「まああれだな。二年も始まったばっかりだし、気長にやろうぜ」
「お、みやっち良いこと言うね」
「だろ？」
「うわ～お。今ので台無し」
「おい」

こんな具合で千咲の話の後は、いつもの様に昼食を楽しんでいたのだが、昼休憩も終わりに差し掛かっていた時の事である。
「お兄さん！」
明るい声で、千咲がオレを呼ぶ。
オレが声の方を向くと、千咲はハグをしてくる。
「会いたかったですよ～！」
「そうか」
「……反応薄くないですか？」
「いつもこんな感じだろ」
正直、面倒くさい。

昔はこんな風にベタベタしてこなかったというのに、何故か今はこんな感じだ。
全く会わなかった一年間で、こいつに一体何があったのだろうか？
後ろに座っている綾小路グループの皆は、ポカンとしてしまっている。愛里と啓誠に至っては、眼鏡がずり落ちてしまっている。……まあ無理もない。自己紹介の時とのギャップが、激しすぎる。
少し経ったあと、千咲が落ち着いてきた所で、オレは周りに聞こえないよう小声で彼女に話かける。
「おい、今日の夜話せるか？」
「……はい」
「なら２２時に、オレの部屋な」
一秒にも満たない会話。
「ごめんなさい皆さん。食事の邪魔をしてしまって」
「え？　あ、いいや全然大丈夫だよ～」
「兄妹仲がいいのは素晴らしい事だしな」
「そうだな」
「うんうん」
オレから離れ、後ろの皆へと千咲が一礼して謝罪する。

波瑠加、明人、啓誠、愛里の順で返す。
「千咲」
「ん？どうしたんですかお兄さん？」
「友達はいいのか？」
「……は！　そうでした！　失礼します皆さん！」
千咲は残像が見える程に素早く礼をすると、風のように去っていった。……相変わらずだな。
と、ここで――チャイムが鳴った。
「凄いねきよぽんの妹。きよぽんとは正反対」
「そうだな……ぶふっ！　清隆があんな感じで接して来るのを想像したら笑えるな」
「笑うな明人」
「で、でも、良い人そうだったよ！」
「双子でもこう違うものなんだな」
各々最後に軽くオレのことをディスってから、席に戻っていく。
ピロンっと音が鳴る。
オレのスマホからだ。
恵からのメール。要約すると、『どういうことか説明しろ』という事だ。

いつの間にか自分の席に着いていた恵を見ると、物凄く鋭い眼光で、こちらを睨みつけている。

おっと怖い。とりあえず、『今日の２２時にオレの部屋に来い』とメールを送っておいた。

「綾小路くん」

送信完了のメッセージが表示されると同時に、俺は隣人から声をかけられた。まあ、堀北だ。

「何だ？」

「説明しなさい」

「……もう授業前だぞ」

「そうね。だから簡潔にまとめなさい」

……こいつ。あの最終試験後は少し丸くなっていた気がしたが、気の所為だった。

「……双子の妹だ」

「それは聞いたわ。私が聞きたいのは、何故このタイミングで彼女が転校してきたのかを知りたいのよ」

「理由は別に、知らなくていい。教えたくないしな。でもこれだけは約束しよう。千咲は決して、このクラスの害になるような事はしない」

「彼女はあなたの様に、実力を隠すなんておかしな事をする人物では無い……という解釈でいいのかしら？」

「……それは本人に聞いてくれ」

大して意味もないこの会話は、千咲が教室に入ってきた事により止められる。授業開始ギリギリだな。

オレの後ろの席へ腰掛け、慌ただしく準備をする。

「……全くあなたと似ていないわね」

「昔からよく言われるよ」

小声で少し失礼な事を言ってくる隣人に、オレは適当に返す。……適当と言ってもまあ、これは事実だ。

オレと千咲は全く似ていない。それは外見的な意味ではなく、内面的な意味でだ。

千咲がオレの事をどう思っているのかは知らないが、オレは彼女が嫌いだ。

オレらしくなく、少し感情的な思考に入っていると、茶柱が入ってくる。

午後の授業の時間だ。

いつも通り、オレはまた、窓の外を頬杖ついてから見始めた。

2

『千咲、お前はこの試験が終わるまで、極力目立つな』

『綾小路さん、あなたはこの試験が終わるまで、目立った行動はしないで欲しいわ』

一年と二年の合同特別試験が発表された日、オレと堀北が千咲に念押ししていた布石がようやく活きたな。

オレは左手に刺さって貫通しているペティナイフを見ながらそう思考を巡らせていた。

七瀬はオレに憎悪の表情を見せてから帰っていったが、あの表情と、言葉の意味、真意は一体どうなのだろうか？

まあそれについて、今は深く考える必要は無い。今はこの状況をどうにかしなければならないな。茶柱には連絡した。後は――

「千咲、いるだろ。出てきてくれ」

七瀬と宝泉が去っていった方向とは逆の暗闇に向けてそう声をかけると、ゆっくりとした足取りでこちらに歩いてくる人影が現れた。スマホの画面を操作しながらこちらに声をかけてくる。

「バッチリ撮れてますよお兄さん」
「綾小路さん!?」
「お前……どうしてここにいるんだ?!」
軽い調子で登場してきた千咲に、堀北と須藤が驚きの声を上げる。
「オレがここに来る前に連絡を取っておいた。ここで行われていた出来事を、スマホのカメラで記録してもらうためにな」
「なので、私がいるという訳です」
千咲からスマホを受け取り、映像を確認する。確かに堀北が宝泉に殴られた所から、オレが左手を刺される所までバッチリと撮影されている。暗視モードで少々見づらいというのが心配だが、まあこれで大丈夫だろう。
後はこれを宝泉に送り付けておけば更に抑止力となる。先程のやり取りでも十分だとは思うが、念には念を……だ。
「あなた、一体何手先まで考えておけば気が済むのかしら」
「これくらいなら普通だろう。あいつには枷を何重にも巻いておかないとな」
堀北から呆れた表情を向けられてしまったが、しかし声色は賞賛してくれているような雰囲気を感じる。
視線を横に向けると、須藤がオレに向けて頭を下げていた。

「綾小路……すまん！」
「安心しろ。この程度、何の事は無い」
オレが気にしないように言うと、須藤は納得のいっていないような表情をした。
まあ無理もないだろうな……。
今まで何とも思っていなかった人物の、違った一面を目の当たりにした訳だからな。
しかも左手にナイフが刺さっても何事も無いような表情をしている奴を見たら、混乱してしまうのは仕方がない。

「あ、茶柱先生～。こっちで～す」
千咲が突然声をあげる。
少し居心地の悪い雰囲気となってしまったが、バスタオルを手にした茶柱がこちらに駆けてくるのが見えたため、一度この一連の騒動を各々胸に仕舞う事となった。
５月１日、特別試験の結果開示が行われた。
クラスメイトはオレの数学１００点という高得点にも驚いていたが、それに加え、妹である千咲が試験とは無関係で受けていたペーパーテストの結果も開示されたため、皆更に驚いていた。
これは学校側が千咲のＯＡＡ作成のために彼女に課したペーパーテストで、問題内容

はオレ達が受けていた試験と同じだったようだ。

そして、その結果――

国語　９５　数学　９５　英語　９５　理科　９５

社会　９５

揃えるならもっと微妙な点数で揃えればよいと忠告はしてたのだが、案の定言う通りにはしてくれなかったようだ。

「お兄さん凄いですね！　数学１００点なんですか!?」

教室の雰囲気とは場違いな明るい声色と、明るい笑顔（多分）でオレの後ろから声をかけてくる千咲。

「ああ、とりあえず静かにしろ千咲」

振り返らずにそう言ってから茶柱に次の発言を促すように目を向ける。

「そ、それとだが……明日のＯＡＡ更新でお前達の今回の成績が反映された評価となる。各自確認しておくように。綾小路妹の分も、明日追加される予定だ。彼女については、体育の授業で評価が不十分なため、身体能力はＣとさせてもらう」

なるほど……な。頭の中で算盤を弾く。今日千咲が面倒事を起こさない限り、千咲のＯＡＡ総合力はＢくらいといったところだろう。

先日の七瀬から聞いた情報が真実かどうかは別として、ある程度現状把握は出来た。

問題はここからだ。
幸か不幸か、こちらの手駒が去年と比べて増えた事は間違いない。しかし相手が見えなければ戦略の練りようが無いが、予防線は張っておける。
この日まで目立たないで過ごすようにと指示していた千咲の存在が明るみになった事で、察しの良い奴は気づくだろう。
慎重に駒を進めていかなければいけない。

???

「有栖ちゃんはホントにカワイイね～！」
「千咲さん、やめてください即刻に」
月城理事代行との対話を経て、今後の方針の確認をしようと、部屋に千咲を呼んだはずだったのだが、何故か坂柳がついてきた。
しかも千咲は、人形のお手入れをするかの如く、坂柳に抱きついて撫で回している。
「ねえ清隆、これどういう状況なの？」
「オレに聞くな」
隣で恵が困惑した表情で尋ねてきたが、そんな事をオレに聞かれても困る。オレだっ

て混乱してるんだ。
　そもそも、千咲が坂柳と面識があるということに驚いたのだ。……いや、ホワイトルームにいたオレの事を知っていた坂柳なら妹である千咲を知っていてもおかしくは無いのだが、こんなにも親しげに交流する程とは思わなかった。
「今夜集められたのは、今後の方針確認のため……でしたよね」
　いつものクールで不気味な事を考えそうな表情で話し始めた坂柳だったが、くっついている千咲のせいで台無しとなっている。
「そもそもお前は呼んでいないぞ坂柳。お前は自由に動いてもらっても構わないと思っている。というより、自由に勝手にやっといて欲しいと思っている」
「おやおや、嫌われたものですね」
　坂柳には、俺の指示で動かすより、彼女の判断で勝手に動いてもらった方がいい。そもそも、オレの指示通り動いてくれる確証はどこにもない。
「千咲、とりあえずちゃんと座れ。あと坂柳はもう帰ってくれ」
「はい」
　オレが少し語気を強めて言うと、千咲はすぐに座り直した。
「私は勝手に話を聞かせてもらいます。状況把握をしておきたいので」
　坂柳はオレのベッドに腰掛け、こちらの話を聞いてから動くという意思表示をする。

まあこれから話す事が彼女に聞かれて困る事は無いため、気にせずに話を始める。
「一年生の、極一部の生徒に、特別試験のようなものが課されているようだ。その内容は、『綾小路清隆を退学させろ』だ」
「は!?」
オレの言葉に、恵が大声をあげて驚く。
「なるほど。それはあの理事長代行の入れ知恵ですか?」
「おそらくそうだ。そして今現在オレが確認出来ているその試験を受けている者は、D組の宝泉和臣と、七瀬翼。A組の天沢一夏だ」
「あっ、天沢……って、この前の?」
「そうだ」
恵は先日、天沢とオレの部屋で会ったため覚えていたようだ。
「千咲、お前には恵と共に、一年の情報なるべく多く、集めてもらいたい」
「分かりました」
「わ、分かった」
正直、ここはミスだ。この指示がミスという訳ではなく、指示するタイミングが、ということだ。
試験前、千咲が目立っていない時に行うべきだったのだが、彼女をまだ信用出来てい

なかったというのも事実。この点については致し方ない。
「そう言うと思って個人的に私が一年生の情報を集めておきました……まだ半分しか集められていませんが」
「……！」
「マジ？」
千咲の衝撃の言葉に続いて、オレのスマホが振動する。
見ればメールが届いており、千咲から一年生の情報が細かく書かれた文面が添付されていた。
「お前を侮っていたようだな」
「状況は把握していたので、今後お兄さんがそう指示してくるだろうとは予測出来たので……まあ、遅く動き出してしまったのは否めませんが」
「いいや、充分だ」
この情報の真偽は、実際に本人と話してみないと分からない事があるが、千咲の今までの行動を見る限り、嘘は少ないだろう。
「私、すること無くない？」
横からオレのスマホを覗き込んでいた恵が、そう呟く。
「いいや、お前にはこの情報の真偽を確認してもらいたい」

「え？　でも、これって……」
「別にオレは、こいつに全幅の信頼を寄せている訳じゃない。妹だからこそ疑っている」
　こいつが妹じゃ無かったなら、少しは信頼する事が出来ただろう。
　千咲の能力を疑っているということでは無い。あくまで今渡された情報を疑っているという訳だ。
　この前のオレの味方宣言も、百パーセント信じた訳では無い。
「いいんですよ軽井沢さん。仕方が無いことなので」
「そ、そうなの？」
　恵は首を捻ってむむむっと何かを考えているが、オレは構わず話を先へと進める。
「千咲には引き続き、情報収集をお願いしたい。それを恵が事実か否か確認した後、作戦を立てる」
「やっぱりそれ二度手間じゃない？」
「これが確実だ」
　正直、情報収集から恵に任せておきたいという気持ちもあるが、千咲に何か仕事を与えて監視下に置いておかなければ、何をするか分からない。二度手間だとは自覚しているが、これが確実。
「そう、か。清隆が言うなら私はそれでいいけど、千咲さんはいいの？」

「それは愚問ですよ軽井沢さん」
ここで、今まで静観を決め込んでいた坂柳が、口を開く。
「彼女はこうするしか無いんです。いくら彼に信頼されていなかろうと、必死に、がむしゃらに彼に従うのみ。選択肢は無いのですよ」
千咲はそれを聞いて少し俯く。
理解しろ。お前は信用出来ないんだよ千咲。少なくとも後一ヶ月、お前への警戒心を解くことは無い。
まあ、坂柳はもっと信用出来ないんだがな。
「じゃあそういう方針で、よろしく頼む」
「了解」
「分かりました」

一年からの見えない攻撃に備え、オレたちは動き出した。